

2024年度 九州歯科大学 海外短期派遣プログラム

タイ王国 8/26-28 私立ランシット大学 8/28-30 国立シーナカリンウィロート大学

歯学部歯学科4年 石野愛佳, 島田優花, 島津葵, 野村朋加

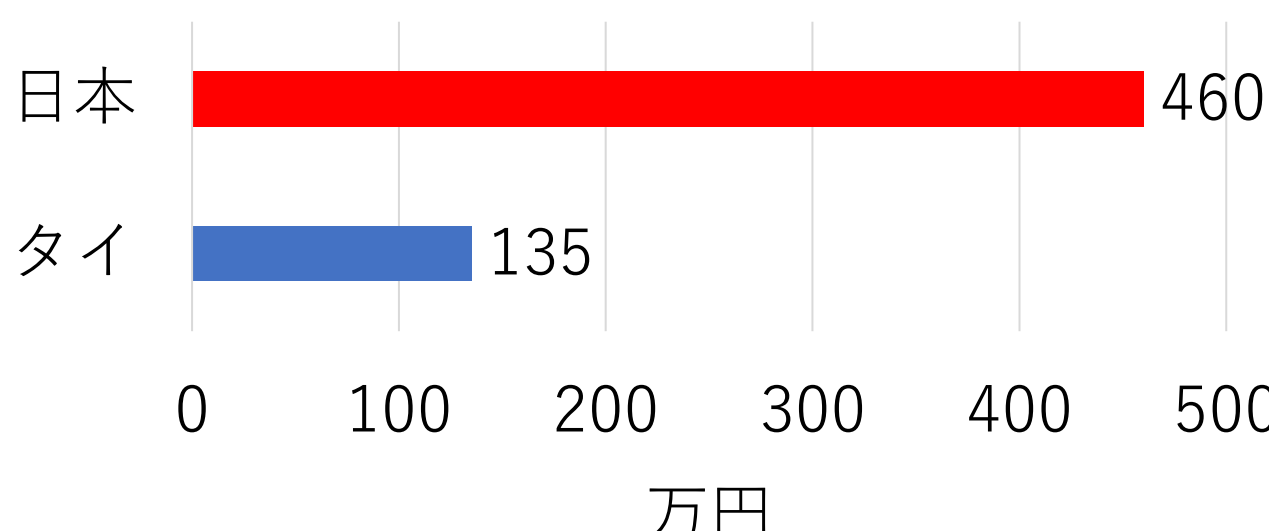
目的

- ・短期派遣を通じて、英語による実践的なコミュニケーション能力を養う。
- ・タイの文化や生活様式に触れ、多様な価値観への理解を深める。
- ・日本とタイの歯科医療および歯学教育の相違点を学び、国際的な視野を広げる。



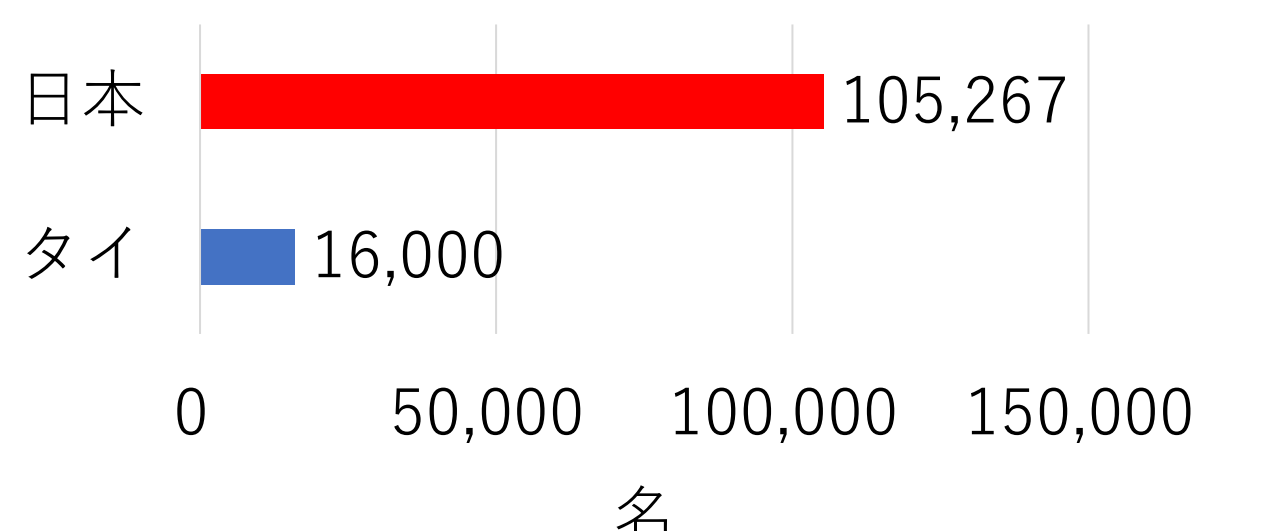
タイ国概要

平均収入



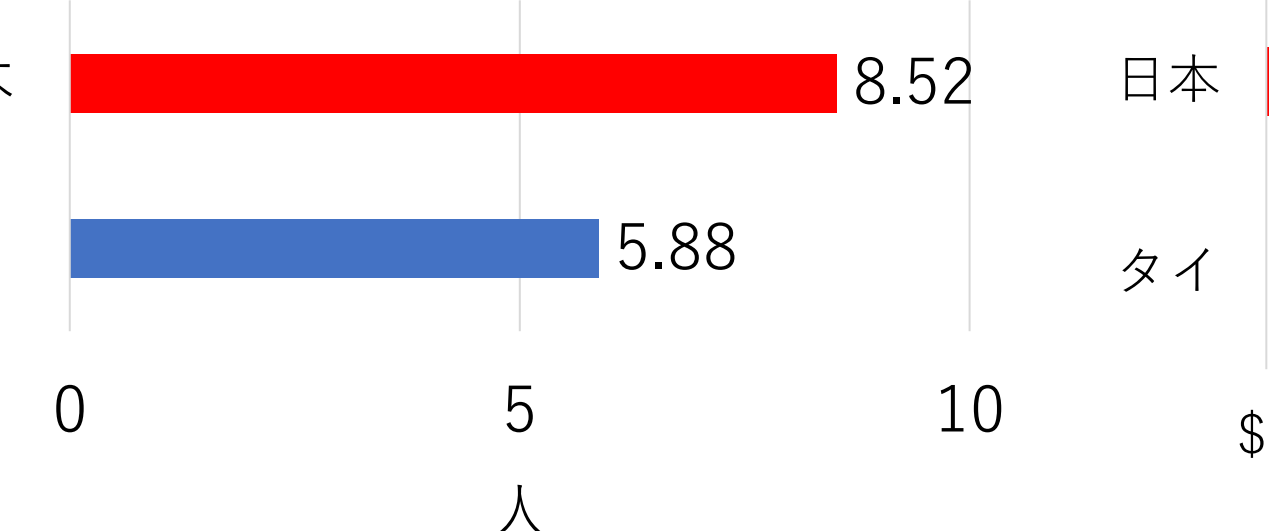
国	平均収入 (万円)
日本	460
タイ	135

歯科医師数



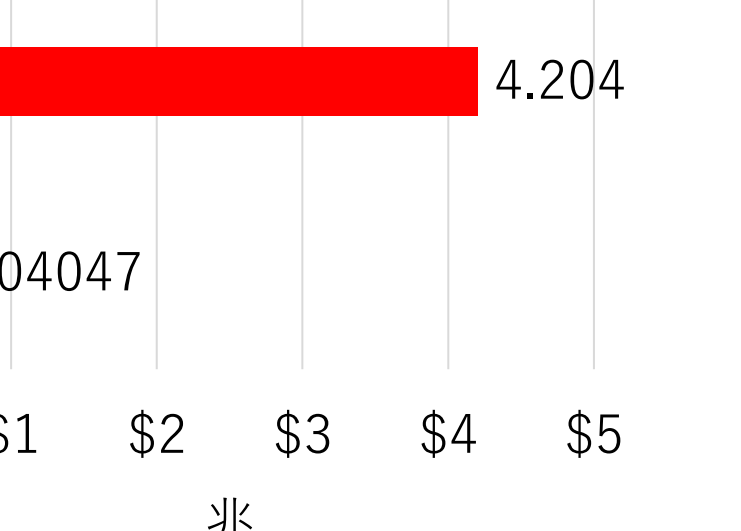
国	歯科医師数 (名)
日本	105,267
タイ	16,000

人口1万人あたりの歯科医師数



国	人口1万人あたりの歯科医師数 (人)
日本	8.52
タイ	5.88

GDP



国	GDP (兆円)
日本	4.204
タイ	0.0004047

・タイ王国では、人口の多くが首都バンコクに集中しており、地方との間で経済格差が大きいことが社会的な課題となっている。歯科医療においても同様で、地方では経済的負担が重く、歯科治療の普及が進まない一因となっている。

・歯科医師の総数自体が日本と比べて少ないうえ、首都圏に偏在している現状がある。そのため、地方の歯科医療を支える人材として、タイ独自の職種である「デンタルナース」が配置されている。一方で、日本のような歯科衛生士制度は存在していない。

・タイには国民医療保障制度があるが、日本のような国民皆保険制度とは異なり、年間に保障される医療費はおよそ3,000円程度にとどまる。このため、経済格差の影響を大きく受けやすく、治療内容にも地域差が生じていることが課題となっている。

私立ランシット大学		
・総合大学であり、多くの学部を擁する広大なキャンパスを有している。バンコク郊外に立地しているため学生寮が整備されており、銀行や携帯電話ショップなどもあり、キャンパス内は小さな街のような環境となっていた。 ・歯学部では、授業料のほかに実習器具を個別に購入する必要があり、6年間で総額約650,000バーツ（約290万円）の費用がかかる。歯学部棟には6つの講義室と150台の実習台があり、実習資料は英語で作成され、PDF形式で配布されていた。 ・基礎実習ではアマルガム充填用の供覧用大型模型が用意されており、窩洞形成が視覚的に理解しやすい工夫がされていた。現在はレジン充填への移行が進んでいるものの、アマルガムは安価かつ入手しやすいため、教育現場でも使用され続けている。 ・学生実習では、サベイングの体験を行い、卵形の模型を用いて台の角度を変えながらアンダーカットの違いを体感する実習に参加した。また、修士学生の抄読会にも参加し、英語で行われる授業を見学した。抄読会では口腔乾燥に関する論文が取り上げられたが、タイでは依然としてう蝕が大きな社会問題であり、口腔乾燥症の研究は日本に比べて非常に少ないことが印象的であった。 ・登院実習においては、5・6年次の学生が指導医の監督のもとで患者を担当し、タイ歯学教育コンソーシアムが定める「minimum requirement」を満たさなければ卒業できない。たとえば、シーラント10症例以上、インレーまたはアンレー10症例以上などが求められている。 ・学生が行う治療は教員よりも安価で提供され、臨床経験の機会として位置付けられていた。口腔外科では、学生による智歯や矯正のための抜歯も行われていた。 ・登院式の予行練習にも参加し、学生が膝をついて教員に礼をするなど、日本とは異なる敬意表現が文化的に強く印象に残った。		
国立シーナカリンウィロート大学		
・2・3年次に模型実習、4・5年次に学内での臨床実習、6年次には学外病院での実習が行われる。卒業後は国家試験合格後、国指定の施設で1年間の臨床研修が義務付けられており、希望によらず地方勤務となる場合もある。 ・コーヒーや噛みタバコなど着色性嗜好品の影響により、PMTCでは粗めのペーストが使用されていた。高価な咬翼法用フィルムホルダーは、学生が手作りで対応していた。 ・同大学病院ではインプラントや智歯抜歯も行われ、多くの患者が来院していた。学生にとっては、実践的な臨床経験の場となっていた。		

成果・今後の課題		
本プログラムを通じて、日本とタイにおける歯科医療体制や歯学教育の違いを実地で学ぶことができ、教科書では得られない知識や臨床技術、文化的背景への理解を深める貴重な経験となった。タイの歯学生・教員との英語での交流を通じて、言語を超えたコミュニケーションの重要性を実感し、国際的な視点を持つ歯科医師としての自覚が芽生えた。 今後は、異なる医療制度や価値観を理解し、多様な背景を持つ患者に柔軟に対応できる力をさらに高めていくことが求められる。今後進展する医療ツーリズムやインバウンド医療の場においても、本プログラムで培った経験を活かし、文化的配慮と国際感覚を備えた歯科医療の実践を目指したい。		

謝辞

本プログラムの実施にあたりご支援をいただきました、九州歯科大学基金、九州歯科大学国際連携部会の先生方、ランシット大学、シーナカリンウィロート大学の教員、学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

2024年度 九州歯科大学国際交流プログラム



9/9～9/11 中山医学大学 9/12～9/13 台北医学大学
歯学科3年 亀山未夢 杉山響 田中さや 宮川野乃花



目的

- 台湾の学生との交流を通して学習意欲を高める。
- 台湾の医療制度や医療に触れること。
- 歯科医療についての知識だけでなく台湾の文化にも触れる。

派遣国概要

- 台湾の歯科医師数は、1.5万人で日本の1/10である。また、台湾には歯科衛生士の資格は存在しない。
- 歯学部がある大学が8校である。
- 中山医学大学、台北医学大学共に台湾は6年制であるが、国家試験を受験するのは大学卒業後である。
- 病院で行う臨床実習では、6年生で抜歯などの治療を行っている。

プログラムスケジュール

〈1日目〉
台中到着後 「沁園春」で会食
〈2日目〉
9:00～12:00 デジタルシミュレーションセンター
14:00～17:00 口腔外科とスペシャルニーズ科に分かれて見学
夜 「女兒紅」で会食
〈3日目〉
9:00～12:00 口腔外科とスペシャルニーズ科に分かれて見学
14:00～17:00 訪問診療科とスペシャリストクリニックに分かれて見学
学生と交流
〈4日目〉
9:00～12:00 病理科と歯周病科に分かれて見学
台北へ移動
〈5日目〉
10:00～11:00 オープニングセレモニー
11:00～12:00 AR/VR体験
12:30～13:30 「創義麵」で先生方と昼食
14:00～17:45 Pao-Chang Chiang先生の矯正の講義
18:00～20:30 「上海鄉村」で先生方と学生と会食
20:30～ 松山夜市で観光
〈6日目〉
9:40～11:30 病院見学
12:00～14:00 「榮樂園」で昼食
各自観光
〈7日目〉
帰国

実施内容

〈1日目〉
福岡空港から桃園空港に飛行機で飛び、台中まで高速鉄道や MRT で移動して夕方ホテルに到着。その後、中山医学大学の先生お2人にお食事に招待していただき6人で沁園春にて会食。プレゼントをいただいたり、そこで出していただいた台湾ビールの話をしたりと他愛ない話をして楽しんだ。この派遣初めての会食で本格的な中華料理を体験して、回転テーブルの上に食べきれないほど大量のお料理が出てきて驚いた。お腹をいっぱいにさせて客人を帰らせるという台湾のおもてなしを学んだ。



〈2日目・3日目〉
・デジタルシミュレーションセンター
VIRTUAL REALITY TRAINER を体験した。これは、仮想空間でう蝕除去などの治療を体験できるものである。使用する器具の選択やバーの回転速度、う蝕除去率、治療に要した時間などが表示される。1歯ずつ歯を回転させることや、倍率を大きくすることが可能なため、自分が行った治療の振り返りが容易にできる。臨床応用もされており、患者さんの口腔内印象を読み込み、今後予定する治療のシミュレーションを VIRTUAL REALITY TRAINER で行うことで実際の治療をより確実に的確に行えるようだ。
また、光学印象の体験を行った。器具が重く、歯の隣接面やアンダーカット部の読み取りが難しいと感じた。



・口腔外科
6年生の学生さんが多くいて、先生は1人で診療室内を行ったり来たりして診療していた。台湾の6年生は抜歯をしたり麻酔をしたりと治療できる範囲が日本の学生よりも広がった。縫合糸は日本のような滅菌パックには入っておらず、ピンク色の液体につけて縫合するときにそこから取り出すという方式に驚いた。顎関節の開きに問題がある患者さんが多く、開口度を金属の定規で測ったり、顎関節部に注射を打ったりする治療が行われていた。
・スペシャルニーズ
その診療科は4台のデンタルチェアがあった。そこで初めて台湾のデンタルチェアを見たが、少し日本と違っていた。日本はハンドピースなどがデンタルチェアに付属されているが、台湾はテーブルの横に付属されていた。スペシャルニーズを受診する患者さんは、障害を持った方や鍼治療を受ける患者が多かった。障害を持つ子供が受診する際には、怖がらせないようにバキュームや使用する器具を一つ一つ見せてあげながら診療していたり、デンタルチェアは倒さずに座った状態で診療したりしていた。鍼治療を受ける患者は、矯正治療の経験がある患者が多いという印象を受けた。鍼治療では、顎関節付近に鍼を打つだけでなく、腕や手にも鍼を打っていた。鍼を打った後は約20分後に鍼を抜いて終了するという形式だった。Yu先生が日本製のデンタルフロスやスポンジブラシ、ドライマウス用のスプレーを見せて下さった。サンスターやマツキヨなど聞き馴染みのあるメーカーを使用していた。日本の製品はとても良いと先生がおっしゃっていた。



・スペシャリスト
患者さんに口だけが見えるカバーを被せて歯科用チェアを倒した状態で1時間半の手術だった。日本と同じような銀色器具が台の上に大量に並べられていた。手術室内には顕微鏡もあったが今回は目視で行われた。上顎前歯部の歯槽骨を露出し埋まっていた黒い膜を取り出していた。英語での専門用語があまり理解できず聞き取れなかったが、おそらく歯槽骨を補填して後に義歯からインプラントに置き換えるといった手術であった。切り取った歯肉や血液がついたガーゼなどを器具が乗せられた台の上にポンポン置いていくところが日本とは違うようで驚いたが、局所麻酔で患者さんに声がけをしながら淡々と進んでいった。

・訪問診療科
訪問診療の場と一緒に同行させていただいた。今回は、先生1人と研修医1人と、学生3人と共に同行させていただいた。学校を出る前から日本という白衣（登院服）を着て、車に乗った。移動中もずっとその服で移動していて、衛生的にそのままでもいいのだということに少し驚いてしまった。日本人との感覚の違いであると感じた。今回は、2人の患者さんを訪問した。どちらの患者さんも寝たきりの患者さんであり、病院に通うのは困難だと痛感した。家に着くと、学生と研修医のみで素早く、バキュームや器具の準備を行っていて、先生は患者さんのご家族とお話しされていた。準備が整うと、研修医の方が、スポンジやスケーラー等を用いて口腔清掃を行い、学生も光を当てる人、補助をする人と別れテキパキと動けていることがすごいと感じた。



〈4日目〉
・病理科
口腔病理に関する診療科であった。ここでは、学生が患者と医療コミュニケーションを取り、患者の訴えを聞いている様子が見られた。特に印象的であった症例は、口腔内の乾燥によって粘膜に歯の痕がつき、舌に粘着感があったものだ。このような患者には口腔内温度でジェル状になって粘膜を保護するスプレーを用いて、歯と粘膜の接触による粘膜へのダメージを防いでいた。他にも、肥厚性扁平苔癬の所見を肉眼で見ることができ、貴重な経験をさせてもらえたと同時に自分の勉強不足をひしひしと感じた。
・歯周病科
歯周病科の診察室は、これまでに見学した診療科と比較して、患者さんの人数が少ない印象で日本の歯科に近いような気がした。歯周病科を案内して下さったLin先生は、歯周病科とインプラント科を専門に行っており、Lin先生のように複数の専門を持つことは台湾ではよくあることだと言っていた。また、治療の順番について説明してくださった。まず最初に口腔内写真やデンタルX線などの検査をし、次に歯周基本治療を行い、最後にインプラント治療をおこなっていくという順序は日本と同じだと感じた。見学の途中で、特別な治療を行う治療室を見せていただいた。その治療室は個室になっており、歯科用マイクロスコープやレーザー、テレビモニターが設置されていた。治療中の術野をテレビモニターに映し出すことで、学生さんがリアルタイムで見て学べるようにしているとおっしゃっていた。

〈5日目〉
台北医学大学を訪れた。最初にウェルカミングがあり、台北医学大学の先生方や学校自体の紹介をしていただいた。台北医学大学は60年の歴史があり、11の学科があることを知った。その後、私たちも自己紹介を行った。事前に考えてはいたものの、やはりいざとなるとうまく話せなかった気がして、悔しかった。また、学校内を少し紹介していただいた。口腔保健学科の講義を行っていた所は、1つの診療所のようになっていて、驚いた。さらに、CAD/CAMの機械が多くおいてあり、初めて見たため感激した。やはり、日本よりこういう部分は進んでいると感じた。そして、AR・VRの体験をさせていただいた。今回体験させていただいたのは、ゴーグルをして歯科医療で使用する器具を組み立てて、正しい向きでセットするものであった。感覚がつかめるまでは難しかったが、良い練習になると思った。午後は、矯正の専門医である Pao-Chang Chiang 先生に歯列矯正の概論を講義していただいた。先生は日本語で講義をし、それぞれのチャプターごとに症例、治療方針、予後について解説してくれた。特に印象的であったのは、先生は症例を見せたあとに治療方針について私たち学生に質問をし、私たちが出した答えについてどうして違うのか合っているのか解説してくれたことである。先生が日本語のネイティブスピーカーではないからこそ、先生の選言言葉が分かりやすく、ゆっくりと丁寧に話してくれるので、私たちが頭の中で十分に考えながら矯正の分野に対し興味を深めることが出来た。矯正のイントロダクションとして、先生に講義していただいたことに感謝している。

また夕食後、台北医学大学の学生に夜市を案内していただいた。



〈6日目〉
病院の歯科の部分を見学させていただいた。新しいとても綺麗な病院だった。Family and Operative Dentistry、Orthopedics、Endodontics、Periodontics、Oral and Maxillofacial Surgery、Prosthodontics、Pedodontics の7つの科があった。その他にも Implant Center、Oral Health Care Center for Special Needs といった施設もあった。歯科用チェア、ユニットは日本のものとほとんど同じであった。小児科を見学した際、小児科は子どもを相手にするので診療室の壁紙が子どもが楽しめるような明るいかわいらしい絵柄になっていたのが印象的であった。



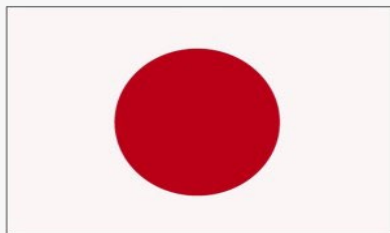
成果

- 現地の学生と交流するという目的は拙い英語ではあったが果たせた。
- 学生との英語でのコミュニケーションを通して英語を使ったコミュニケーションを積極的に行おうとした。
- 電車で子どもに席を譲ったり、お食事の席で招待した人をお腹を空かせて帰らせてはいけないなど、おもてなしや譲り合いの精神に触れることができた。
- 本学と比べて、主に口腔内スキャナーが使われていたり、学生がいつでもシミュレーションの機械を使用できたりと機械化が進んでいる。

今後の課題

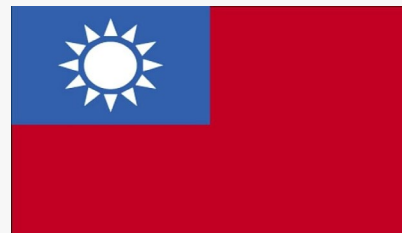
やはり一番は、英語を学ばないといけないなととても痛感させられた。特に、歯科医療で使う専門用語の英語がわからないことが多々あった。言い換えて伝えてもらわないとわからなかったのが悔しかった。なかなか学習する機会がない部分ではあるが、今回学ばべきだ、学びたいと思ったので、自分から学んでいきたい。また、いざとなると言葉が出てこないこともあった。英語を読む力と人と話す力は別であることより実感させられた。英語で会話をできる機会は、日本にいたとそうそうないが、英語で映画を見たり、ニュースを見たりして日頃からもっと触れていきたいと感じた。他にも、まだ私たちは3年生であり、専門科目が始まったばかりであったが、病院見学をしていたり、話をしていたりする中で、「聞いたことあるな」、「見たことあるな」という言葉が多々あった。今まで自分が、学んできたことがばつとすぐに出てこないことを思い知った。そのため、今から復習をしなければいけないと感じた。また、今回体験、見学させていただいた分野の中には、まだ学修していない分野があり、理解することが難しいこともあった。そのため、海外派遣で目にしたことを思い出しながら、これからの学修に励んでいけたらと思う。さらに、世界の歯科事情をもっと知りたいと思った。今回は台湾であったが、4年生ではタイも希望できるし、実現は難しいと思うが北欧など歯科衛生が進んだ国の歯科事情にも興味を湧いた。

2024年度 九州歯科大学国際交流プログラム



派遣期間

高雄医学大学9月8日～11日 台北医学大学12日～14日



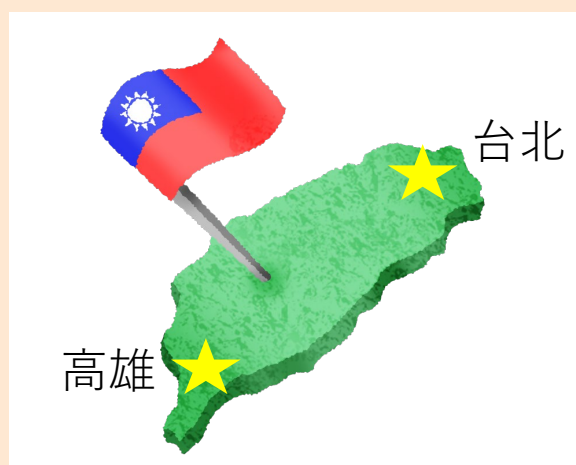
口腔保健学科3年 寅田純伶 服部愛果 船橋実希

国際交流プログラムの目標

- ①歯科衛生士制度のない国の歯科医療の實際を学び、日本で歯科衛生士が果たすべき役割を再考する。
- ②現地の大学の教員や学生と交流することで、台湾と日本の歯科医学教育の相違点を学ぶ。
- ③現地の方との交流を通じて、国際的な視野やコミュニケーション能力を身につけるきっかけとする。

派遣国概要

【台湾について】



- ・面積→36,000km²（九州よりやや小さいくらい）
- ・人口→約23,420,000人（2024年1月時点）
- ・主都→台北
- ・言語→中国語、台湾語、客家語等
- ・宗教→仏教、道教、キリスト教
- ・日本との時差→1時間（日本の方が1時間早い）

【歯科医療について】

- ・全民健康保険という医療保険制度がある。1995年から実施されており、2004年末には人口の99%をカバーしている。歯科の分野では、全民健康保険カードがあれば半年に一度、歯のクリーニング（歯石除去）が受けられるため、多くの国民が1年に2回は歯科医院を受診する。0～6歳の乳幼児は虫歯予防のためのフッ素塗布が受けられる。
- ・歯科衛生士という職業は存在しておらず、一般的に歯科医師の補助はデンタルアシスタントが行う。

派遣大学概要

【高雄医学大学】



- ・設立→1954年
- ・特徴→台湾で最初の私立医学大学
- ・学部→医学、口腔医学（歯学科、口腔衛生学科）、薬学、看護学、健康科学、生命科学、人文社会科学
- ・学生数→約6,500名

【台北医学大学】



- ・設立→1960年
- ・特徴→QS/THEの世界大学ランキングで台湾の私立大学の中でトップレベル
- ・学部→医学、口腔医学（歯学科、口腔衛生学科、歯科技工学科）、薬学、看護学、栄養学、公衆衛生学、医学技術学、人文社会科学、医学工学学、管理学、学際学
- ・学生数→約6,000名

プログラムスケジュール

1日目	福岡→桃園空港→高雄
2日目	高雄医学大学との交流①【歓迎会、附属病院見学、歯科医院見学、会食】
3日目	高雄医学大学との交流②【原住民博物館見学、現地学生の地域保健指導見学】
4日目	高雄医学大学との交流③【VR/AR体験、終了証授与式】 高雄→台北
5日目	台北医学大学との交流①【歓迎会、VR/AR体験、講義受講、会食】
6日目	台北医学大学との交流②【附属病院見学、会食】
7日目	台北→福岡

実施内容

【1日目】

福岡空港にて、これから始まる国際交流プログラムに胸を弾ませながら飛行機に乗り込んだ。約1時間半のフライトを終えてお昼頃に桃園空港（台北）に到着した。桃園空港ではニュー台湾ドルへの両替と悠遊カード（台湾の交通ICカード）の購入を行った。

その後、電車、高速鉄道、地下鉄を乗り継ぎ2時間半ほどかけて高雄駅へ移動した。高速鉄道乗車中に大雨が降り始め、ちょうど台風が近づいている時期であったので、今後一週間悪天候に見舞われないか不安に感じた。

高雄駅からホテルへ電車で移動し、夕食はホテルの隣の牛肉うどん屋でとることとした。そこでは日本語ができるスタッフの方が対応してくれ、会話を楽しみながら牛肉麺をおいしくいただいた。夕食後は高雄駅周辺を少し散策し、明日からの高雄医学大学との交流に備え早めにホテルに戻った。

【2日目】

ホテルで朝食をとった後、高雄医学大学に向かった。まず学校のミュージアムに案内された。ミュージアムは広く、博物館のようであった。大学の歴史や台湾の熱帯医学、助産師、歯科の歴史について学んだ。

その後、歓迎会を開いていただいた。高雄医学大学口腔衛生学科の学生と我々が交互に自己紹介や学校紹介などを事前に準備しておいたスライドを用いて英語で行った。その後皆で一緒に昼食をとった。口腔衛生学科3年生は27人で、そのうちの男性は9人だそうである。学生の出身地や好きな食べ物、おすすめの観光スポットなどの話題で盛り上がった。次の日に一緒に夜市を回る約束をした。

昼食後は、病院見学を行った。小児歯科、障害者歯科、術前検査などを見学した。一般歯科（Family Dentistry）で手術前の口腔診査も行っており、月に1000人ほど診査するようである。

次に、高雄医学大学から地下鉄で一駅の場所にある歯科医院を訪れた。その歯科医院の建物は二つあり、一方は6割の保険適用の処置が対象、他方は2割適用が対象だそうである。自己負担の多い方のビルは五階まであり、インプラント室、小児歯科室、歯科アシスタント用のトレーニング室などがあった。患者の信頼を得る工夫として、トイレの近くにガラス張りの消毒滅菌室が設置されていた。小児歯科では、写真映えするような壁のイラストや待合室のゲームなど、子供が歯科医院を楽しめる工夫がされていた。この歯科医院はSNSに力を入れており、院内がSNS映える場所が多く、医院をアピールするためのユニークな投稿を高頻度で行っているそうである。

夕食は高雄の先生方と中華料理をいただいた。初めて台湾ダックを口にし、あまりのおいしさに驚いた。障害者歯科を専門とする先生とお話しでき、とても有意義な時間を過ごすことができた。

【3日目】

高雄医学大学に集合し、まずは客家という台湾の原住民族の博物館にバスで向かった。客家の人々は中国から伝わる文字や書物を神聖なものと捉え、専用の焼却炉で焼却し、灰は川に流し天に帰したそうである。その他原住民族の文化について理解を深める良い機会となった。

次に地域のコミュニティアセッサーで高雄医学大学の学生が口腔ケアに関するレクリエーションを行う様子を見学した。訪問した施設は高齢者の社会参加や健康増進などを目的としたデイサービスのような施設で、客家の高齢者が多く通っているようである。学生のレクリエーションでは、唾液腺マッサージや舌回し、パタカラ発音などを動画を見せながら利用者と共に行ったり、自作のすごろくの中で口腔ケアを利用者に実践してもらったりしていた。利用者の中には我々に積極的に話しかけてくださる方もいた。英語が通じなかったため会話は上手くできなかったが現地の方々との交流を楽しんだ。

続いて、障がい者施設を訪れた。高雄医学大学の学生は1年前から、この施設に2週間に一度訪問しており、それにより利用者は昼食後は必ず歯磨きをする習慣がついたそうである。利用者の歯磨きへの動機づけとして、歯磨きをするポイントが加算され、貯まると景品と交換できるという方法をとっていた。高雄の学生が歯磨きによる疾病予防の重要性、ブラッシング方法（バス法）、フロスの使い方を模型を使って説明し、鏡を使いながら利用者と練習していた。また、6分割法によるPCR値の測定、口腔清掃用具の説明、口腔内診査なども行っていた。台湾の学生は利用者の反応を伺いながら自信を持ってプレゼンテーションを行っており、その姿に圧倒された。

学生の発表終了後は引率の先生が買ってきてくださった臭豆腐を味わった。施設を出る際には、施設の利用者が育てているという台湾バナナと野菜をお土産に持たせてくれた。



桃園空港のロビー



牛肉麺



高雄医学大学口腔衛生学科の皆さんと



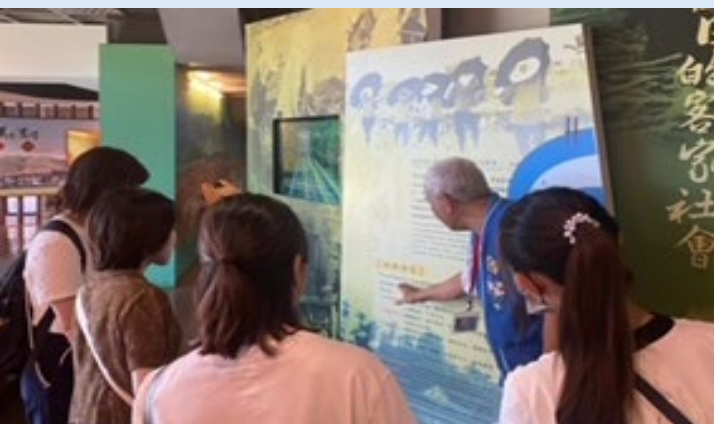
病院見学の様子



歯科医院見学の様子



台湾ダック



博物館で現地の方から説明を受けている様子



顎模型を用いて口腔ケアの方法を利用者が教わっている様子（高齢者施設にて）



口腔内診査・プレゼンテーションの様子（障がい者施設にて）

【3日目つづき】

夜は前日に約束した台湾の学生と共に夜市を回った。小籠包やスイートポテトフライ、台湾ティーを飲んだ。台湾の学生が親切に案内してくれ、大変楽しい時間を過ごすことができた。この際、現地学生に「なぜ台湾では集団指導でバス法を指導するのか」と質問すると、「台湾では歯周病の罹患率が高いため歯周病向けのバス法を基本の指導としている」と教えてくれた。

【4日目】

午前中は高雄医学大学でAR/VRを体験した。AR設備では術者磨きがどの程度できているか評価を受けられる。センサーのついた歯ブラシを用いてマネキンに術者磨きを行い、画面上で設定された部位のプラークを除去する。ブラシを振動させる回数や磨く順番などが細かく決められており、どれくらい実践できたかを点数でフィードバックを受けることができる。センサーのついた器具は歯ブラシの他に歯間ブラシと粘膜ブラシもあり、それぞれ練習をし、フィードバックを受けられた。

VR設備では、身体障害がいのある患者に対しての口腔ケアの一連の流れをクイズ形式で学ぶことができる。VRゴーグルをかけると、口腔ケアの現場を疑似体験でき、座学で学んだことを体を使って身につけることが目的だそうである。

この日が高雄医学大学との交流の最終日であったため、最後に高雄医学大学の歯学部長から修了証の授与が行われた。我々が高雄医学大学を去る前には、先生方が台湾バナナや台湾柚子をご馳走してくださり、最後の談笑を楽しんだ。

お昼には高雄に別れを告げ、新幹線と電車を利用して台北のホテルまで向かった。この日は疲れが溜まっていたので、ホテル周辺を散策した後、コンビニでおにぎりとお味噌汁を買いホテルの部屋で食べることにした。明日からの台北医学大学との交流に備え、ホテルで心と体を休ませた。

【5日目】

ホテルからバスで台北医学大学を訪問し、歓迎会に参加した。台北医学大学の教員と私達がお互いに自己紹介を行い、その後、歯学部のカンパスを案内していただいた。歯学部のカンパスは4階建てで九州歯科大学のカンパスより小さめであった。

台北医学大学では歯学教育のためVR/ARの開発を積極的に行っており、今回は口内法X線写真を撮影する際のインジケータの準備やチェアサイドの物品の説明をVR/ARで体験した。VR/ARは慣れてくると現実のように動かすことができ、これからさらに実用化が進めば有効な学習ツールとなるだろうと考えた。

昼食はお弁当とタピオカを用意していただいた。現地の大学院生と英語で、研究内容や学生生活、趣味についてなど楽しく会話しながら昼食をいただいた。

午後は外部講師による「障がいを持つ患者に対する口腔ケア」の講義を口腔衛生学科4年生に混じって受講した。講義では、患者への声掛けやTSD法、腕や肩、頬、歯肉のマッソーラ方法、ブラッシングやフロッシング、ラムネやストローを使った口輪筋を鍛えるゲームなどについて学んだ。現地の大学院生が通訳をしてくださり、講師の方々も熱心に教えてくださったため、大変有意義な時間を過ごすことができた。講義風景は、先生と生徒の距離が近くコミュニケーションが活発で、アットホームな雰囲気が印象的であった。

夕食は、台北医学大学の先生や大学院生と上海料理の会食であった。大学院生に就職や進路のこと、台北医学大学の事務の方にお仕事について伺いながら、高雄での台湾料理と異なる特徴を持つ上海料理を味わった。

会食後には、大学院生の方がホテル近辺の夜市に連れていってくださり、マンゴーかき氷を味わった。

【6日目】

この日は台北医学大学附属病院の見学を行った。まず病院についてスライドを使って紹介していただき、次に病院を案内していただいた。九州歯科大学附属病院と比較し、総合病院であるので歯科のエリアはコンパクトにまとまっており、チェア台数は各科に2～5台ほどであった。歯周病科、インプラント科、小児科、障害者歯科などがあつた。

その後台湾の学生、先生方とランチに行き、午後は自由時間であった。台湾に来て初めて自分たちだけで交通機関を利用し移動したり、英語を使って注文したりする経験をした。訪れたのは九份と台北101であった。千と千尋の神隠しの舞台になったという綺麗な風景や台湾の美しい夜景などを見ることができ、良い思い出になった。

【7日目】

帰国のために朝から電車で桃園空港へ向かった。昼食は空港内のマクドナルドで台湾限定メニューをいただいた。18時頃、無事福岡空港に到着した。こうして一週間の国際交流プログラムはあっという間に幕を閉じた。

成果

- ① 台湾では保険制度のおかげで定期歯科検診の受診率が高い一方、国民のセルフケアへの意識は低いという実態を学んだ。また、週術期口腔機能管理等は看護師が行っている場合が多いが、看護師は口腔ケア以外の業務も多く抱えており十分な口腔ケアは行えていないのが現実だそうである。これらの原因として挙げられるのは、台湾に歯科衛生士がいないことである。日本においては、定期検診でのセルフケアの動機づけや病院での専門的口腔ケアは歯科衛生士が担っている場合が多い。このことから日本で歯科衛生士が果たすべき役割は、口腔保健の専門家として国民の口腔保健への意識を高め、口腔保健が必要とされる場所に適切な口腔保健が提供されるよう尽力することだと考えた。
- ② 台湾の大学と日本の大学で大きく異なる点は、学生と教員の距離が近いという点であると感じた。学生と教員の活発な議論によって学生の意欲や自主性が高められているのだと考えた。また、高雄医学大学では毎月高齢者施設で集団歯科保健指導を行っており、地域での保健活動の多さは九州歯科大学に足りない部分であると感じた。さらに、台湾の学生は集団歯科保健指導におけるプレゼンテーション能力が高かった。原稿を見ずに相手の反応を伺いながら進められるかが教員による評価の判定基準になっているそうである。
- ③ 拙い英語ではあったが、積極的に現地の方々とのコミュニケーションに挑戦した。台湾の学生と進路や歯学教育について意見交換を行ったり、食事会で先生方とお話ししたりする中で、伝えたいことが伝わった時の喜びを味わうことができた。
- ④ 台湾で素敵な方々との出会いに恵まれた。台湾を案内してくれた親切な学生、日本語を独学で学んで翻訳のアルバイトをしている学生、ダイビングが趣味で世界中の海を旅している学生、口腔保健という分野で熱意と誇りを持って働いていらっしゃる先生など、「私もこのようになりたい」と大いに刺激を受けた。



今後の課題

今回のプログラムを経験して新たな目標が生まれた。それは「他国の歯科医療の現状を学び日本と比較すること」、「海外で医療ボランティアに参加すること」である。これらを実現するためには、今回のプログラムで苦労した「自分の言いたいことを素早く英語に変換できる力」を磨いていく必要があると実感した。また、会話をスムーズに進めるには言語だけでなく、様々なことに興味を持って知識をつけておくことも重要だと学んだ。